

2020年の向こうに広がるスポーツ世界 ～動く喜び 見る楽しみ～

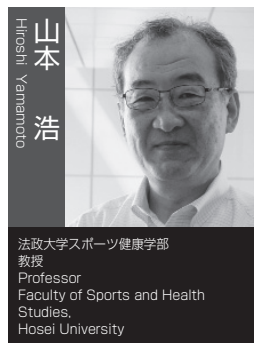
The World of Sports beyond 2020: The Joy of Moving, the Fun of Watching Sports

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに関連したニュースが頻繁に伝えられている。個々の報道を比べてみれば、国際オリンピック委員会が示した、開催都市が追加できる新たな競技の話題や、自治体の参加国に対する合宿地誘致の動きが大きな割合を占める。

半世紀前に開催された東京オリンピックは、高速道路や新幹線といった日本のインフラと、立派な競技場や体育館からカラーテレビの普及までさまざまな分野に遺産を残したが、ソフトの世界にも忘れてならないインパクトを生んだ。私たちの周りにあった“体育”に対して、“スポーツ”という概念が急速に勢力を伸張するきっかけをつくったのだ。

大会の開催まで残すところあと5年あまり。東京大会のためにハコやモノをつくることは避けては通れない。しかし一方で、後世に残すべきスポーツをめぐるシステムを、見えない財産として確立することができるのだろうか。そこを取り逃さないために、巨大イベントをさまざまな角度からためつすがめつしたのがこの文章である。

オリンピックのような大きな競技会に人々が関心を持つのは何があったのか。国際競技団体は、勢力を高め競技を普及するためにどんな工夫を凝らしているのか。“プロ”と言われるアスリートに求められる要件は何か。そうした“プロ”を世界に送り出すための若い世代の才能発掘がどのように行われているのか。そして、豊かになり始めたスポーツに対する私たちのアプローチはどうなのか。2020年に向かう道すがら、スポーツをさまざまな視点から検証することも、すでに東京オリンピック・パラリンピックのレガシーづくりになっている。



山本 浩
Hiroshi Yamamoto

法政大学スポーツ健康学部
教授
Professor
Faculty of Sports and Health
Studies,
Hosei University

The 2020 Olympic and Paralympic Games in Tokyo are a frequent topic of news reports. Many of them have covered the new sports that the host city would be allowed to add following the reform proposal presented by the International Olympic Committee, as well as regional governments' bid to attract participating countries to their regions to set up training sites. The previous Tokyo Olympic Games, held half a century ago, left a variety of assets in the country, including national infrastructure such as expressways and a high-speed railway system (Shinkansen), a magnificent stadium and other sports facilities, and the widespread installation of color television sets. The Games also had an impact on intangibles, which should not be forgotten. In other words, the Games provided a conceptual turning point: the concept of sports as serious endeavors, as opposed to everyday physical exercise, rapidly became prevalent. There are five years until Tokyo 2020. It is inevitable to construct buildings and prepare facilities for the Games. However, would it be possible to create sports-related systems to be inherited by future generations as intangible assets? To focus attention on this issue, this paper closely examines this massive event from various angles. Why do people become interested in big sporting events like the Olympic Games? What are the ideas that international sports organizations have devised to increase their influence and popularize the sports that they promote? What is required of professional athletes? How are young talents discovered in the process of sending professionals to the world stage? How do we approach sports that have begun to expand in terms of variety and skill levels? Examining sports from various standpoints in the lead up to 2020 has already become part of building the legacy of the 2020 Olympic and Paralympic Games in Tokyo.

1 | 人をひきつけるスポーツイベント

ビッグイベントの時代が続いている。世界のスポーツファンを強い力で引っばるオリンピック、W杯サッカー、それに世界陸上を「世界三大スポーツイベント」と考える人がある¹。オリンピックは複数の競技が一堂に会した複合競技会であるのに対して、W杯サッカーと世界陸上は単一の競技で成り立っている。人々の関心を集めるのはそれだけではない。「W杯ラグビー」「世界水泳」「バスケットボール世界選手権」「世界柔道選手権」等、世界一を競う大会がひしめきあっている。

こうしたスポーツが「ビッグイベント」と言われるようになったのは、ほかでもない。膨大な数の人の目をひきつけてやまないからだ。吸い寄せられるのは、スタジアムやアリーナに足を運ぶ観客に加え、画面を通じて、電氣的な映像と音声でこれを見ようとする人たち。その数は、数十億人のレベルに達するとされている。それにしてもスポーツイベントが人をひきつけるのは、いったいどんな力が働いているときののだろうか。

特定のイベントに大勢の人が関心を持つためには、条件が3つ揃うことが必要だ。「一世代の大勝負」「高いレベルの技術や戦術が披露される」、そして「かけがえのない存在が登場する」。

目の前の試合が、「一世代の大勝負」になるためには、いくつかの条件が重ならなければならない。まずは希少価値。どんな勝負であっても、毎日対戦が組まれたり毎週顔合わせがあったりするのでは「一世代」はおろか「大勝負」にもなりにくい。ある意味、対戦が初めてであればそれはそれで十分だ。1976年に東京で行われた、アントニオ猪木対モハメド・アリの一戦はこれに相当する。

さらに求められるのは、そこに、勝たなければならない強い力が働いていること。それは当然、真剣勝負になる。対戦する両者が「不倶戴天の敵」であれば、負けることは許されないし、因縁の勝負であれば、過去の歴史が眼前の戦いに新たな付加価値を付け、周りを取り囲むファンの気持ちもいやが応にも高まろうというものだ。



北京五輪開会式（2008年8月8日）：筆者撮影

勝ったあとで手にできるタイトルや栄誉が大きければ大きいほど、そのポルテージは上がっていく。世界一の称号、とてつもない大記録、初めてのオリンピックの金メダル。大きな栄誉は、滅多に手にできないものでなければならない。ローカルダービー²のように年に2回の対戦も悪くはないが、それよりも4年に1回の対戦となればその価値がいや増しに増す。

スポーツが人を引きつけるふたつ目の要素は、そこに登場するアスリートたちが極めて高いレベルの技や技術を披露することだ。世界記録を更新したばかりの100mのスプリンターの登場。連勝記録を伸ばした女子レスラーの国際試合。伸び盛りで早い出世を果たした大関候補の初日の取り組み。W杯で世界を制したナショナルチームのタイトル獲得後初めての試合。どれもこれも日常の世界とはかけ離れた高いスピードや技術、持久力や戦術がパフォーマンスを支えていて、見る人に身を乗り出させる力がある。体操競技の一瞬の離れ業に多くの人が目を凝らすのは、成功するか否かで歓喜と悲嘆が交錯するのを知っているからだし、フリーキックの弾道から視線を外さないのも、高い技術同士のぶつかり合いが明暗を分けるのを心得ているからだ。たぐいまれなる才能に、最高レベルの磨きをかけ、最大のサポート態勢を背景にぶつかり合う。現代の競技スポーツは、世界の頂点を目指すために力のあるアスリートに人と金を惜しまずつぎ込んで、優れて高い能力を発揮させようとする。

錦織圭選手の活躍が、子どもを持つ親の多くをテニスにかり立てているといわれる³。「わが子にはテニスの世界で活躍できる才能があるのではないか」。そんな目でコートサイドからストロークを眺める親の姿を、ひとりよがりの発想と一蹴せずに考えてみたい。

どんなときでも、親の視線は子に向かいがちだ。幼稚園に上がればわが子の「運動会」の応援に駆けつける。といっても「運動会」というイベントに関心があるのではない。関心を向けるのはあくまでもわが子。2軒隣の、別の幼稚園に通う子どもの運動会のことは眼中にない。高校生になったわが子が、甲子園のマウンドを踏みでもしようなものなら、親戚一同駆けつけるというのも当たり前現象なのだ。いつの時代にも、親の子を見る目は基本的に変わらない。自分と血のつながった存在が、檜舞台で活躍する。それを間近に見てみたい。かけがえのない人物が活躍する可能性があるだけで、人は揺さぶられ動かされるのだ。この感情はスポーツに限らず、芝居の舞台でも書道の展覧会でも同じ力となって現れる。

「かけがえのない存在」はなにも、個人にとどまるわけではない。自分の母校のチームにも同じような感情が湧いてくるから不思議だ。夏の出張先で新聞のスポーツ欄に目を走らせるとき、知らないうちに母校の予選の結果を探したことはないだろうか。かつて通った学校は、卒業してから幾歳過ぎ越しても郷愁を感じさせることがあるし、都道府県対抗駅伝のふるさとチームもまた同じような思いを起こさせてくれる。こうした感覚は、次元を変えると日本代表に対する一体感につながっていく。

長い間スポーツ実況の世界でマイクの前に座ってきたが、日本代表の試合を放送するときには、Jリーグの一戦を伝えるのとは明らかに心の置き方が違っていた。勝利をめざすのがJクラブのチーム同士であれば、攻める側を主語にして状況を伝える。チャンスに対しては、それを生かそうとする攻める側の動きを主人公にした描写になるのだ。「アントラーズは、小笠原。柴崎。来たあっ！ダヴィー。うーん、よく押さえた西川。レッズ、速い攻め。柏木へ。ドリブル入る。左から橋本。打ったあー」。あく



W杯サッカーブラジル大会（2014年6月14日）：筆者撮影

までもボールを持った側が主人公。攻めと守りが攻守所を変えれば、自ずと伝え方も変わってくる。

ところが、これが日本代表と外国の代表チームの試合となると様相が一変する。攻めていても守っていても、日本代表を主語にして実況する時間が圧倒的に増えるのだ。「サウジ攻めてきた。ドサリ、入ってくる。前に鈴木秀人、ディフェンスに入る。ニッポン危ない、ニッポン危ない。ニッポン、危ない。シュート来たあ。川口出た。止めた、止めた、止めましたニッポン」。

テレビの向こうで試合の様子を、固唾を飲んで見守るのは、日本代表に思い入れのある人々。代表の試合は特別で、このときばかりは日本偏重で試合に臨む。といっても、何も“応援放送”をするわけではない。日本代表の視点で多くを伝えようとする。相手が攻めてくれば「どこか危ないエリアがあるのではないか」。日本が相手ゴールに殺到すると、「どう攻めればチャンスが広がるのか」。あくまでも日本がどう試合を運ぶべきかという観点でさまざまな状況を検証していく。

かつての放送では必ずしもそうではなかった。忘れない、1993年10月のカタール、ドーハ。のちに「ドーハの悲劇」といわれた、ハンス・オフト監督率いる日本代表とイラク代表のアジア最終予選。後半の45分を回ったところで、イラクが放ったシュートがふんわりと日本代表のゴールを割った瞬間「イラク、同点！」と口にする自分がいた。今であれば、「日本、追いつかれた」

とすべき所を対戦相手のイラクを主語にして伝えているのだ。奇しくも同じ試合を地上波で放送していた民放のアナウンサーも同じようにイラクを主語にして伝えていた。

かけがえのないチーム。多くの日本人にとって、それは日本代表と重なっている。世界が広がれば広がるほど、この試合が落とせないものであればあるだけ、見る人の一心同体感は日本代表にまで広がっていく。

オリンピック・パラリンピックを改めて考えてみよう。不思議なことに人をひきつける三要素をすべて備えているのがこの大会なのだ。一世代の大勝負で、世界最高のレベルの技術やスピードが見られ、しかもそこにかけがえのない存在が現れる。ビッグイベントの代表といわれるオリンピックが人々を引きつけて止まない訳がそこにある。

2 | サーキット化する国際大会

ビッグイベントの時代にスポーツ界の外回りでは、大きな変化が起こっている。競技の光と輝きを増やすための努力だ。それぞれの国際競技団体が、人気選手の戦いぶりを見せようと、ツアー形式で世界を転戦する舞台を用意し始めているのだ。国際柔道連盟の同じような試みも、始まってすでに5年が経過しようとしている⁴。その狙いは複数の要素からなっている。各地で開催されている国際大会を、オリンピックの出場権に連動する形で格付ける。力のあるスター選手を国際大会の場に登場させる。スター選手といえども、格付けの高い国際大会に何度も出てポイントを稼がないと、オリンピックの出場枠獲得にてこずることになるのだ。一流の選手が世界から参集することで、肝心の国際競技会は人々の関心を集めることになる。一方で、競技団体は「選手の実力の向上がはかれるうえに、選手の相対的な優劣が分かる」と、こうした国際大会の成績をもとにランキングを付け始める。選手にとっては、スケジュールがタイトになると敬遠する向きもあるが、ライバルの実力を知るチャンスとして積極的に受け止めるものも出てくる。結果として、世界の強

豪が競って大会に集まり始め、国際連盟の経営に資する結果をもたらしているのだ。

こうした手法は、以前からスキー⁵やテニス⁶の世界で取り入れられていた。どちらも早くからプロが活躍していた競技で、オープン化を推し進める過程でポイントや賞金からランキングを付ける仕組みが生まれていったのである。選手の生活や興行としての価値を優先したスキーやテニスに比べると、柔道のツアー化は視点がやや異なるが、そうした競技会の設定が可能になったのは、そこに参加する選手たちの日常がプロフェッショナルアスリートの生活リズムに近づいてきたからこそのことだとも言える。

もうひとつの大きな流れは、年代別のカテゴリーの充実だ。柔道では大人のカテゴリー「シニア」の下に18歳から20歳までの「ジュニア」、15歳から17歳までの「カデット」のクラスを設けて、世界ランキングを公表している。こうした年代別のカテゴリー分けは、若い選手たちにとっても大きなモチベーションになっている。同時に、とかくスポンサーの集まりにくい若い年代の競技会に、“世界一”が登場することによる集客効果も期待できるのだ。

世界の競技団体がおしなべて年代別のカテゴリーの充実に熱心なのは、競技団体独自の経営方針によるところもあるが、IOC国際オリンピック委員会の方向付けによるところも大きい。社会のオリンピックに対する関心が高まるにつれ、オリンピックで実施される競技になりたいとする競技団体は増え続ける一方だ。それでも、1万人を超える競技者が一堂に会してのオリンピックは、運営に大きな負担を強いることになり、開催する都市が限定されかねない心配がある。そこで、競技者総数に一定の限度を設ける施策が、かねてからIOCの中で適用されてきた。その後、「アジェンダ2020」⁷という新たな方針が提示されたが、そこでも基本的な選手総数は10,500人と規定されている。一方で、実施される競技には、既定のものを見直ししながら新しいものを加えるかどうかを検討することによって、オリンピックの全体としての価値を維

持しようという動きがある。どの競技を外し、どの競技を新たに加えるのか。そうした選択をする際に、IOCが定めているのが競技団体を比較する際の判定基準⁸だ。現在の基準で言えば、国際競技団体のガバナンスのあり方を重視する一方で、加盟している各国内競技団体の数や、世界選手権の開催実績や歴史、さらにはアンチドーピングへの取り組みに加えて、若い年代別の世界大会を実施しているかどうか、若い人たちの関心のあり方なども評価の項目に加えられている。IOCが国際競技団体に求める基準の数々をきっちり守れないようでは、オリンピックから外されかねないという危機感が常に競技団体を取り巻いているのだ。

3 | プロフェッショナルアスリートの時代

スポーツの世界では、“プロフェッショナル”であることを“金銭的利益”との関わりで考えてきた時代がある。その対比概念“アマチュアリズム”が、“金銭を得ない”と広く理解されてきたからである⁹。現代社会では、さまざまなスポーツで金銭的利益を享受するアスリートの存在が当たり前になっているが、そのターニングポイントになったのは、「オリンピック憲章から『アマチュア』の用語が消失」した1974年のことになる¹⁰。相前後して、さまざまな競技団体がアマチュアの規定を変更したり削除したりする時代がやってくる。社会におけるスポーツへの期待とスポーツ選手のありようとの間で整合性をとれなくなったからである。

とはいえ、アマチュアそのものがなくなってしまったわけではない。わが国では長い間、学生野球とプロ野球の関係をめぐってアマチュアとプロのありようが厳しく問われてきた。学生野球のあるべき姿を示す学生野球憲章に“アマチュア”の文字を認めることはできないが、「学生野球は経済的な対価を求めず、心と身体を鍛える場である」¹¹と、現在も金銭との関わりに歯止めをかけている。「学校教育の一環」としての学生野球が、この精神を大切にする姿勢はこの先も変わらないであろう。

それでは、今の時代、“プロフェッショナル”といわれ

るアスリートは、“アマチュア”とどう違うのだろうか。その構図は、スポーツそのものの「見られる」側面の大きさの変化とともに変容してきた。高いレベルの戦いを见たいという大衆の声に応じ、優れた演技を見せたいという興行主の要請に応えるために、パフォーマンスの向上はもとより、人間としての魅力も求められる時代に入ってきたからである。

アスリートの能力に関わる要件は複数存在するが、重要な指標は「時間の配分」だ。打ち込むスポーツのために、自分の大切な時間を使っているのかどうか。すべての時間が、スポーツのために供せられているのかどうか。

スポーツをすることで生活が成り立つ人は、それをもって“プロ”を標榜することも可能だが、そうした人間が現代的な意味で“プロフェッショナル”でいられるかどうかは、どのように時間を組み立てられるかに影響を受ける。スポーツ以外の問題で翻弄され、スポーツを忘れて打ち込まなければならない課題や仕事があるうちは、最高最強のパフォーマンスを導く環境づくりには届きにくいからである。アスリートAが、自らが打ち込むスポーツのために、24時間365日をコントロールしているとすれば、それはプロフェッショナルな取り組みが可能な状態にあると言える。大切なやり投げのために身体のメンテナンスをし、準備のための身体づくりをし、試合後に十分な休養をとる。週末に予定されている試合をベースにして、週明けから次の週明けまでを組み上げていくのは、頂点で闘うアスリートにとってはごく当たり前の日常だろう。そのサイクルを拵げていけば、計画的な1年が浮かび上がってくるし、オリンピックサイクルの4年も、視野の中に入っているに違いない。オリンピックと言われる世界最高峰で闘う人たちの準備は、1日をベースにしながら、1週間、1ヵ月、1年、そして4年とそれなりの時間配分をしているはずなのだ。

自分の打ち込む仕事のためにありったけの時間を使うという意味では、どんなサラリーマンにも「仕事のプロ」を標榜する権利はある。しかし考えておかなければならないのは、使っている時間を何を中心に回しているかだ。

仕事が終わる午後6時を過ぎたところで、同僚とともにそそくさと焼き鳥屋への道を急ぐ。処理をしなければならぬ膨大な書類の山を明日に残して、慣れ親しんだ居酒屋で飲み交わすビールには何物にも代えがたいものがある。しかし、ちょっと待ってもらいたい。ここでサラリーマンXは、時間を何のために使っているのだろうか。このところ増えてきた膨大な書類を、いかに効率よくミスなく処理するにはどうすればよいのか。ヒントを得たくて焼き鳥屋に、過去の経験者を誘って話しが及ぶとなるのならいざ知らず、ただただ上司の悪口を言って憂さを晴らしているような飲み会では、プロと言うのはおこがましい。焼き鳥屋に行くために仕事をするのは“アマチュア”、あすの仕事のために焼き鳥屋に行くのが“プロフェッショナル”。両者には、厳然とした違いがある。

プロにとってあるかないかがその実力を左右しかねないのが「情報」だ。「情報」と言っても、さまざまある。自分の身体の状態を知る「情報」に始まって、競技のルール変更や試合会場の条件を知っているかどうかの「情報」。さらに大切なのは、対戦相手の直近の状態や行動、それに攻め口等だろう。選手やチームの対戦が頻繁になると同時に、選手間のレベル差が縮まってきたこと。科学や医学が動員されて、合理的な戦法選択や体調維持の方法が進歩してきたことが背景にある。必要な「情報」を手に行っているかいなかで結果が左右される時代になっているのだ。

4 | 世界に広がる才能発掘

スポーツ科学やスポーツ医学の発展は、競技開始の年齢と技術の習得との間の相関関係を教えてくれるようになった。競技によっては早めの技術習得がない限り、世界のトップにはたどり着けないことが常識になり始めている。一方で、日本全国どこにいても、子どもの頃からシステムチックに理想的な指導を受けさせることができるかと言えばそうでもない。元来日本のスポーツは、学校で入口を見つけ、そこから短期間に集中して競技に打ち込む態勢でスポーツ選手がつくられてきた。それが、

始めるならば中学生より小学生で。できればもっと早い段階でと促成の機運が強くなっている。子どもが特定のスポーツに打ち込もうとするときのきっかけは、親の勧めや友だちの誘い、それに漫画やテレビの影響を受けて人気の高いものに気持ちが傾きがちだ。マイナースポーツといわれる競技には、かねてからおいそれと子どもが集まってこない状況が続いていた。それが、競技特性に応じて適正年齢から始めさせた方が優れた選手を生みやすいという理論のもと、若い選手の発掘に取りかかる団体が目立つようになってきた。全国各地でじわじわと広がりを見せている若いタレントの発掘、育成だ。

今様のタレント発掘に関する最初の報道は、アメリカで行われた「トライアウト」¹²が他に先んじている。この考え方が日本に取り入れられるようになったのは、2000年代になってアメリカンフットボールのXリーグがチャレンジングに始めたものが早い。その後、ボブスレーに陸上競技のスプリンターを起用する等、競技転向の形で本格的に取り入れられるようになった。

「子どもたちの才能を、ふさわしい競技の中で開花させたい」。そんな思いで始まった福岡県のタレント発掘事業は、2004年が初年度だった。それぞれの競技団体が、競技特性を考えながら、若い才能の発掘に向かったのは、ある意味自然の成り行きであった。こうした試みはそれなりの成果につながっていて、福岡県の事業からはすでに22人の日本一を生み出している¹³という。もともとJOC日本オリンピック委員会の肝いりで始まったタレント発掘事業は、1996年アトランタ五輪の不振を背景に、日本の競技スポーツのレベルを上げるために練り上げられたものだ。

その後、2007年には岡山県や和歌山県でもタレント発掘事業が始まり、さらに競技に特化した北海道の美深町や下川町、^{おといねづぶ}昔威子府村等でもタレント発掘と育成が進められてきた。こうしたタレント発掘の拠点は2012年段階で全国の11自治体に及んでいる。その後、平成25年度にはJSC日本スポーツ振興センターが、24道府県、541の市町村とネットワークを結び、タレント発掘に全

国規模のレベルで本格的に乗り出す時代を迎えている。

若いタレントを見つけ出して、適切なトレーニング環境を用意しようという動きは世界中に広がっている。厳密に言えば、世界の方が先駆けている。日本のそれは、かなりの部分でオーストラリアの先進的な取り組みに負うところが大きいし、それぞれの国が同じように適性に合った種目や競技の転向を勧める態勢を築いている。

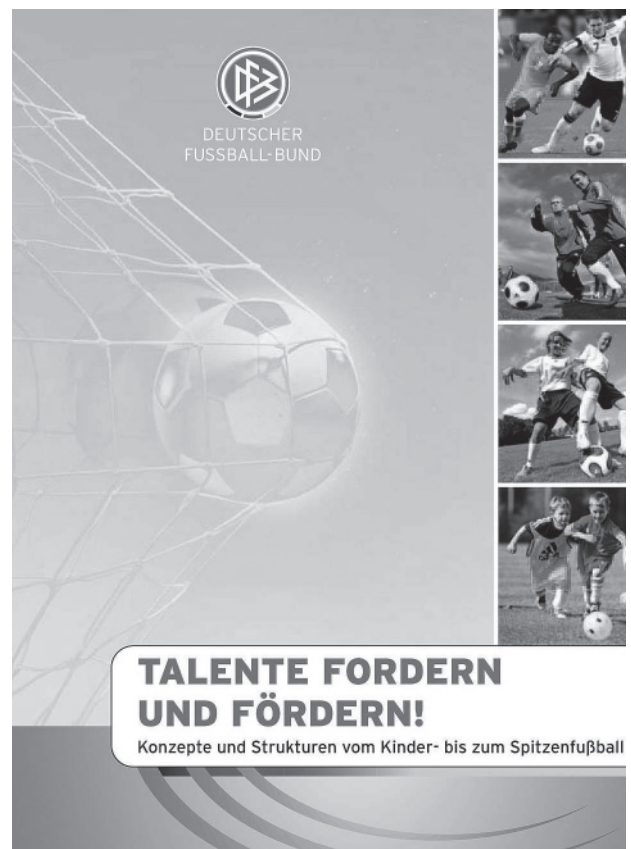
5 | ドイツのタレント発掘

タレント発掘で異彩を放っているのはドイツだ。少子化が背景にあるのは、この国でも置かれた条件としては同じだが、少し違うのは、ここには他の欧州諸国と同じような、移民による文化の混交が始まっているという背景がある。

大きな規模で行われたのが、ドイツサッカー協会が2002年に始めたタレント発掘事業¹⁴だ。ドイツ国内に366¹⁵ヵ所の拠点を設け、そこに各地に眠る優れた能力を持つサッカーのタレントを週に1度、月曜日に集めてトレーニングをする。それぞれの拠点でドイツ協会が認定する複数のコーチが最新の効果的なトレーニングを施すのが売りで、認定されたコーチの数は全国で1,300人。地域の指導者と中央との間をつなぐコーディネーターがさらに29人配置されている。

目的としていることは、①ひとつの地域のなるべく多くのタレントを見てその才能を強化すること、②才能溢れる選手のクラブでのトレーニングを補って個々に強化すること、③クラブでありがちな、成果と時間とに縛られたものとは違ったトレーニングをすること、④自分のクラブと個人練習のためのモチベーションと練習のヒントを与えること、⑤地域協会の指導者により、定期的な情報のタペを設けて、366ヵ所すべてに均等な支援を行うこと。

拠点の指導方針は、①個々のタレントがどの段階のトレーニングをすべきか判断すること、②技術的なものと戦術的なものとを注意深く使い分けて育成すること、③基礎的な技術は少しずつ進め、細かいところまで改善す



「タレント育成と発掘」ドイツサッカー協会
(<http://fussballtraining.com/blaetterfunktion/talentfoerderung/>)

ること、④練習とプレーを同じように重視して組み合わせること、⑤細部まで気を配り、正しいコーチ（説明、選手を絡めたデモンストレーション）をするのが成功への早道、⑥技術的・戦術的に大切なことには、2から5のブロックに分けシステムチックに、しかも集中して磨きをかけること、⑦サッカー的な知見だけを伝えるのではなく人間性も形成すること。

こうした手法によって、ドイツでは優れた才能の開花が促進されていると認識されているが、一方でそこに潜む問題点も指摘されないわけではない¹⁶。小さなクラブにやってきた才能発掘に関わる指導者の眼鏡にかなわなかった子どもの心理はどうだろう。才能を認められなかった選手の受けるダメージは小さくないというのだ。中にはショックで眠れなかった子や不登校になった子もいると地域の指導者は伝えている。

プログラムの実施に取りかかってすでに12年を経

たこの仕組みは、サッカーの能力を高め優れた選手をリーグや代表に送り込むことだけが目標になっているのではない。むしろ、ドイツ国内に生まれている社会状況に対応する手立てにもなると考えられていた。ドイツには第二次大戦後、国の復興にともなって大量の外国人労働者が流れ込んだ。いわゆる「ガストアルバイター (Gastarbeiter)」といわれる人たちだ。すでに1950年代には労働力不足のために国外からのガストアルバイターの募集が行われていた¹⁷。当初は、数年ドイツに滞在しやがては帰国するというのが一般的なパターンだったのだが、次第に移民受け入れ国としてのドイツに定住する人たちが増えていく。やがて、各地に誕生し始めた小さなコミュニティが、昔からドイツに住む人々との間に軋轢を生み始める。私自身、1974年にインターン生 (プラクティカント) としてドイツ中部の町、マンハイムに滞在したことがあるが、当時すでにガストアルバイターとそうした人たちが暮らす地域の問題が地元新聞にたびたび取り上げられていたのを覚えている。

文化や生活習慣を異にする人々の定住で生まれた問題はその後、1990年代になって東ヨーロッパの国々の体制崩壊がもとで生まれた大量の移民とともに、それまでとは違ったボリュームでドイツの不安定要素となっていった。小さなトルコ語圏の生活域の中で育つトルコ人を両親に持つ子どもは、普段はドイツ語の授業の行われる学校に通いながら、家に帰ればトルコ語で暮らし、トルコ語でサッカーに興じる。そうした子どもの中に優れた能力を発揮する存在がありながら、そこにトルコサッカー協会の指導の手が及ぶことはない。これをそのままにしておく手はない。ドイツ協会のタレント発掘の施策は、ドイツ人には見つけにくい才能をドイツサッカーに還元するという狙いだけでなく、ドイツサッカー圏のなかに生まれ始めた異文化サッカー圏をドイツ化する試みでもあったのだ。

2014年、ブラジルで開催されたW杯サッカーのドイツ代表を見れば、その成果が現実になっているのが分かる。スターティングメンバーには、トルコ代表に

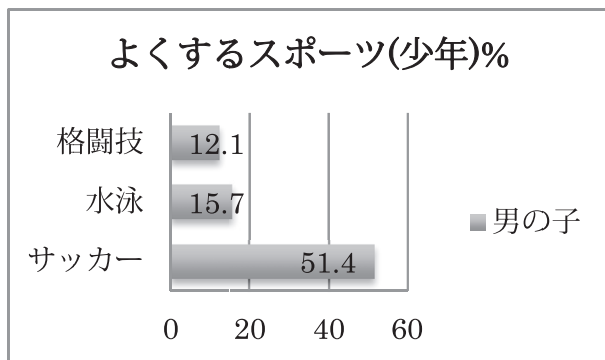
も選ばれる権利を持った“エジル”がいたし、チュニジアにルーツを持つ“ケディラ”、それにガーナの系統を引く“ボアテング”が顔を揃えていた¹⁸。先祖のいる母国のユニフォームを着るチャンスがありながら、ドイツのユニフォームに袖を通したかった若者たち。ドイツのタレント発掘は、これからも多彩な能力に彩られた強いチームをつくり続けるのかも知れない。

6 | 子どもたちを引きつける

こうしたサッカーのタレント発掘が、それなりに子どもたちを引きつけるのには理由がある。才能を伸ばし、努力の末にポストをつかめば自分の将来がどのようになるのか、具体的なイメージを描きやすいからだ。欧州の国内リーグは、かつてないほどの盛況を示している。イングランドのプレミアリーグは、最近の報道によれば莫大な金額で放送権料を更新した¹⁹と伝えられたし、スペインリーグはいまだに世界最高のリーグだと言われ続けている。画面でふんだんに見る機会のあるプロサッカーは、子どもたちにとっても大きな吸引力を持っている。

もうひとつの魅力は、そのゲーム性にある。記録を争うスポーツにも、克己的な魅力、自己陶冶的な喜びが潜んでいるが、サッカーのような対抗戦型の勝敗ゲームは勝つ喜びが楽しみにつながりやすい。

こうした流れの中で、ドイツの陸上競技連盟 (以下ドイツ陸連) が先進的な動きに手を付けた。子どもたちの行動を調べたうえで、あらたな陸上競技プログラムを開始したのだ。ドイツ陸連の新プログラム制作の理由付けは、まずロベルト・コッホ研究所の調査結果を示すところから始まる。研究所の調査によると、近年の子どもたち²⁰の生活パターンは、一日24時間のうち、横になっている時間が9時間、座っている時間が9時間、立っている時間が5時間、活動しているのがわずかに1時間だというのだ。ドイツの別の調査では、この年代より上になるともう少し活動的になるというデータ²¹があるため、それほど悲観するものでもないようだが、陸上競技の関係者にはかなり心配になるデータと映ったようだ。ここから



Die Gesundheit von Kindern und Jugendliche in Deutschland (2014RKI)

招かれた結論は、“子どもたちをスポーツに取り込まなければとんでもないことになる”という思いだった。

そこでドイツ陸連が始めたのが、学童向けの陸上競技プログラムの制作だ。プログラムの制作にあたってドイツ陸連は、大人と子どもの感性の違いを調べることにした。複数の大人と複数の小学校低学年の子どもをA地点からB地点まで移動させるテストをし、その行動パターンに着目した。大人が概して、平坦で直線的でなおかつ労苦なくB地点にたどり着くのをよしとしたのに対し、子どもの動き方は対照的だった。子どもたちは、花を摘み、石を拾い、虫をつかみ、行きつ戻りつしながらB地点にたどり着いたのである。「子どもは小さな大人ではない」。ドイツ陸連は、この結果を反映して、これまでの「大人がする陸上競技を子どもにもさせる」スタイルから決別することを決めたのだ。2013年1月1日から始まった新たな試合形式のメニューは、陸上競技の基本的動作を身につけさせながら、子どもたちがくり返しやりたくなるような仕組みが取り入れられている。

その前段階は、2010年に発表された「青少年の陸上競技プログラム」²²にある。とはいえ、このプログラムを現今のものに比べると、多様性を追い求めてはいるものの散漫な感じが否めない。一方で今回のものは、内容も洗練され、その意図するところも明快で分かりやすい。その狙いには、ひとつひとつうなずける言葉が並んでいる。

競い合う種目は、大人になってから取り組むはずの陸上競技に順応できるようにそれぞれのカテゴリーが用



Dezember 2012



WETTKAMPFSYSTEM
KINDERLEICHTATHLETIK



Wettkampfsystem Kinderleichtathletik 2013 年版 (ドイツ陸上競技連盟)

意されている。スプリント、短距離。中距離走。障害走、ハードル。跳躍。投擲。使う道具も、競う方法も大人のそれとは明らかに違うが、学年が上がるにつれ大人の競技に近づけていく方法が提示されているのだ。

チームは、「チームU-8」「チームU-10」「チームU-12」の3つのカテゴリーから構成される。つまり、「6歳と7歳」「8歳と9歳」「10歳と11歳」の3グループで、いずれもチームを基本とするとしている²³。

チームの構成は、6人から11人の児童とし、男女混成としたうえ、2学年で1チーム。チームの中の上級生は、個人種目でない限り上のカテゴリーで出ることも可能。チームの対戦は、U-8の場合は3から4種目。U-10では、4種目から5種目、U-12では4種目から6種目としている。いずれも「走る」「跳躍」「投擲」を入れたうえで、必ず「ハードル系」を加えるように要請されている。

さらに、競技会がクラブ対抗の形式をとること。そこに学校チームが加わってもよいとすること。週に1回以

上開催してはならないこと。ひとつの競技会は3時間以内で終わるように設定すること等、子どもたちがバーンアウトしないような歯止めが事細かに決められている。

ポイント形式で優劣を争う学童用陸上競技会マニュアルは、チーム同士の獲得点数の推移が常時確認できるように配慮すべきだと、勝ち負けにこだわることを楽しむための工夫もなされている。

実際に大会に出た子どもたちの反応は、実に生き生きとして喜びに満ちあふれていた。もういちどやりたい。もっと速く走りたい。そんな声があちこちから上がっている現実を目の当たりにして、10年後15年後にドイツから優れた陸上競技の選手がでてくる可能性を感じないではいられなかった。

子どもたちをターゲットにした魅力ある指導は、日本でも熱心な体育教師によって独自に編み出されている例がある。経験と研究を積み重ねた末の優れた教育を施している教員も少なくないが、ドイツの強みはそれを競技団体が一気に遂行し、しかも時間とともにバージョンアップを重ねているところにある。

7 | スポーツを見る

私たちの身の回りのスポーツが爆発的に存在感を高めているのに対して、どうも物足りないのがスポーツを見る立場からの教育だ。スポーツをすることで生まれ体得する喜びや開放感は何ごとにも代えがたいものがある。しかも運動不足がきたす健康への影響を考慮すれば、子どものうちに身体を動かす習慣をつけることが大切なのは言うまでもない。たとえば、現在の学習指導要領が「それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように」²⁴としているのもうなずけるところである。だが一方で、スタジアムに勇躍するアスリートの何百倍もの人たちが画面を通じてスポーツに接している時代だ。にもかかわらず、スポーツそのものの見方を教える教育は、中学校年代では「体育理論」としてわざわざ行われているに過ぎない。現実には教室で教わること

よりも、家庭のテレビやワンセグの画面からもたらされるサービスによって、眼前の試合の見所や戦術の分析に耳を傾けていることが多いのではなかろうか。

スポーツの見方は、何も教室でばかり身につけるものではない。むしろスタジアムに足を運んで試合を観戦しながら、スポーツの本質をわきまえた教育者に、高いレベルのスポーツに潜む社会性や規範を教えてもらうことができれば、スポーツに対する人々の取り組みはどんなに変わることだろう。野球場やサッカースタジアムで、集団で観戦する修学旅行生の姿を見ることがあるが、こうした教育現場での観戦が全国の学校という学校でもっと頻繁に行われれば、スポーツ教育の質の向上が図られるだけでなく、さまざまな競技団体にもポジティブな影響を残すものと期待されるのだが。

競技の現場に観客として関わる場合の基本的な行動は、サッカーやラグビーであればどうしてもボール中心に視線が動きやすい。主人公はボールで、目の前に展開する選手はメッセンジャーの働きしかしないように見えてしまう。勝負を中心に考えるからこそ、得点という勝負を決定づけるボールの行き来に目を凝らすことになる。当たり前と言えれば当たりの観戦様態だが、これもおそらく私たちの持つ動物的な性情が原因なのだろう。わが家に飼われている犬も猫も、目の前にボールを投げれば視線はそれを追うようになるし、3歳の孫もボールが転がれば歓声を上げて走り出す。

サッカーの試合でボールが動きを止めた瞬間、突然、選手のことを思い出すことがある。フリーキックの前の本田圭祐の顔に、得点の可能性を見いだしたくなってその目を見つめてみたり、タッチライン際で時間稼ぎをする相手フォワードに憎らしさを感じたりするのも、ボールがエネルギーを失っている間の人間の反応だ。試合を見るものはどうやら、ボールが常に勝負をめぐる動いている間だけ、その行方を追い続けたくなるものらしい。

ボールの勢いが止まっている時間が長ければ長いほど、つまらない試合として、気持ちがそがれてしまうことがある。実のところ、スポーツはもう少し複雑で、選手ひ

とりひとりが試合時間のすべてに渡って、勝負のための行動をとり続けられはしないのだ。大切なプレーのために息を止めている時間は確かにあるが、息を吐く、息を吸う時間もそれぞれ必要だ。Aが息を止めてタックルに入る間に、Xは息を吸う。Yが息を吐いている間に、Zが息を止めてシュートを打つ。こうした選手間のやりとりがうまく運んでいるときに、チームは中断なく攻撃のリズムを維持することができるのだ。11人全員が息を吸っているような場合には、相手が簡単につけ込んでくる。

たとえば、ボールを見るのを止めてみる。ひとりの選手にじっと目を凝らし続けるのだ。遠藤保仁選手に最初から最後まで目を釘付けにし、決して離さない。ことばで言うのは簡単だが、やってみると意外にこれが辛い。どうしてもボールの方に気持が行ってしまいがちなのだ。それを我慢して、ずっと遠藤選手を見続ける。しばらくすると、いろいろなことが見えてくる。「こんなに休んでいるのか」「この時間帯は、ここまで上がっているのか」「この場所だけは相手に渡したがるんだ」「あ、引っぱった」「今度は早めに走り出した」。遠藤選手を見つめている視線の周りに、やがてボールがぼんやりと感じられるようになったらしめたものだ。

次の試合に出かけたときに、同じポジションの別の選手に目を凝らしてみる。すると、やがて2人の違いが見えてくる。「遠藤選手はあんな風にしていたのに、中村憲剛選手はこうなのか」。中盤のポジションにいる選手の違いが、サッカー観戦の経験が少ないのに手に取るように分かり始める。気が付けば、いっぴしのサッカー通として、友人とボランチ談義ができるようになるのだ。

ことは何もサッカーばかりではない。陸上競技を例にとってみよう。競技場の第3コーナー近くに席を取る。そこで行われるのはやり投げだ。選手のひとりに目を付ける。どんな準備をしてくるのか。タオルを持って何をしているのか。1回目の投擲の順番が来るまでの時間の使い方はどうなのか。やりを手にとってどうするのか。投げる前、投げたあとの反応はどうか。どんなときに近くに陣取るコーチに相談に行くのか。ここで大切なのは、

投げられたあとのやりを見ないようにすること。やりに目が行くと、投げた選手の反応を見落としかねないからだ。勝負に重大な関わりのあるやりの届いた地点を確認しないままやり投げを見続けることは、少なからず苦痛をとまなう。それでも、やりを見ずに選手を見続ける。何試合か、同じ選手を見続けるとそれだけで、その日の選手のコンディションの善し悪しが分かってくる。何度もやり投げを見続けたあとならば、思い切ってコーチの所に歩み寄ってみよう。気になる質問をひとつだけぶつけてみれば、あなたのやり投げの見識は相当深いところまで到達するに違いない。

8 | 2020年に期待する

オリンピック・パラリンピックは、世界のビッグイベントだ。そこには、一世一代の大勝負がかかっているし、世界最高水準の能力を極めて高いレベルで体現するプロフェッショナルアスリートが参集し、そのうちの何人かが私たちにあってかけがえのない人たちで構成されているはずだ。

日本の国民性は、周到な準備をしてことを計画通りに進め、それが果たせたときに喜びを感じるようなところがある。今はそんな周到な準備のときだが、この準備が、ただ2020年の夏にだけ向かっているのではないという認識で動いていけるのだろうか。東京大会が終われば、その遺産で過ごしていけると思ひ込んではいないだろうか。大会の成功を願うあまりに、持てるエネルギーを圧縮して爆発的にことを進めると、2020年で息が切れて、あとは惰性に任せることになりはしないだろうか。

ドイツの競技団体に見られる才能発掘の工夫は、特定の年月だけをターゲットに始められたものではない。スタートしたら、あとはなるようになるというのではなく、中断なくチェックをしながら必要な修正を加える姿勢がそこにはある。あらかじめ予定を立て、それにしがって着々と準備を進める。そうした行動に責任と自信を持ちながら、2020年が近づくにつれさらにその先の世界を想像しながら進む。そうした姿勢を涵養することが、東

京オリンピック・パラリンピックのある意味のレガシー

なのだと私は思っている。

【注】

- ¹ 英国BBCの調査による。<http://www.bbc.com/sport/0/30326825>
- ² サッカー等で、その地方のクラブチーム同士によって行われる試合（スーパー大辞林）。
- ³ 「錦織効果？ テニス盛況 元プロ平木さんら指導」（朝日新聞／大分県）2014年9月24日朝刊
- ⁴ 09年からは世界ランキング制＝柔道（時事通信社）2008年3月
- ⁵ FIS国際スキー連盟の主催するワールドカップは、1967年から正式に始められた。<http://www.banskoworldcup.com/index?id=1807&lang=en>
- ⁶ ITF国際テニス連盟のツアーは、1970年から。それまでも、プロで構成するツアーが存在したが、ここに参加した選手は、4大大会には出られなくなる宿命だった。<http://www.atpworldtour.com/Corporate/History.aspx>
- ⁷ IOCが2014年12月に決定したオリンピックの中長期改革案。
<http://www.olympic.org/news/olympic-agenda-2020-from-decision-to-implementation/242211>
- ⁸ IOCのオリンピックプログラム委員会は、2004年の総会で判定基準を決定し、2011年にこれを改定。現在では、8分野39の基準を設けている。<http://www.olympic.org/olympic-programme-commission?tab=programme-review>
- ⁹ 石井昌之（2015）．19世紀近代スポーツの誕生と展開 中村敏雄他（編）「21世紀スポーツ大事典」大修館書店 pp.576、森川貞夫（2015）．アマチュアルールの制定と特徴 同 pp.737
- ¹⁰ 内海和雄（2012）．アマチュアリズムの解体 井上俊他（編）「よくわかるスポーツ文化論」ミネルヴァ書房 pp.31
- ¹¹ 学生野球憲章（公財）日本高等学校野球連盟 <http://www.jhbf.or.jp/rule/chapter/index.html>
- ¹² 軟式野球出身の鈴木慶子内野手が、トライアウトに参加するという報道がある。（朝日新聞96年1月4日）
- ¹³ NHK福岡放送局 特報フロンティアHPより http://www.nhk.or.jp/fukuoka/frontier/back/back_131115.html
- ¹⁴ <http://www.dfb.de/talentfoerderung/talentfoerderprogramm/>
- ¹⁵ 初年度は390カ所で始まったが、現在は366カ所に整理されている。
- ¹⁶ <http://www.trainertalk.de/fussballtrainer/board926-nachwuchsf%C3%B6rderung-profifu%C3%9Fball-und-der-dfb/board5-nachwuchsf%C3%B6rderung-konzepte-trainingsmethoden/714-negative-seiten-der-talentf%C3%B6rderung/>
- ¹⁷ 「ガストアルバイターの歴史」 http://www.planet-wissen.de/alltag_gesundheit/gastarbeiter_und_migration/geschichte_der_gastarbeiter/
- ¹⁸ 2014年6月16日ブラジルW杯 ドイツ対ポルトガル
http://www.dfb.de/die-nationalmannschaft/turniere/weltmeisterschaften/?spieledb_path=%2Fmatches%2F513273
- ¹⁹ プレミア放映権、3年9,300億円＝イングランド・サッカー（2015/02/11-12:39/時事通信社）
- ²⁰ 「グルントシュレー」の子どもたちが調査の対象になっているから学年で言えば、1年生から4年生。
- ²¹ Ergebnisse der Studie “Gesundheit in Deutschland aktuell 2012” GEDA
- ²² 2010-DLV_Broschuere_Bundesjugendspiel
- ²³ ただし「U-12」については、個人記録を付けてもよいとしている。
- ²⁴ 中学校保健体育指導要領解説 保健体育編 平成20年7月 文部科学省 pp.3